



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3917 号 2017.9.24 発行

重度の知的障害者、傷害容疑で逮捕 さいたままで補助なく刑事手続き、専門家「有効でない」警察「適正な措置」 埼玉新聞 2017年9月24日



自宅で息子（右）を見守る母親＝さいたま市

重度の知的障害者の男性（30）＝さいたま市＝が今年6月、市内の施設で別の利用者を負傷させたとして、傷害容疑で逮捕、送検された。男性は勾留されずに釈放されたものの、刑事手続きの中で、障害特性を理解してコミュニケーションを補助、支援する人の立ち会いはなかった。専門家は「刑事手続きは有効とは言えない」と指摘。逮捕した大宮東署は「適正な措置だった」として

いる。

男性は重度の知的障害と自閉症で、厚生労働省の障害者支援区分6段階のうち2番目に重い障害で、コミュニケーションを取るのが困難だという。会話の内容や状況を理解できず、相手の言うことに対して相づちを繰り返す傾向がある。

知的障害者が入所する施設でトラブルが起きたのは6月26日午後6時半以降。男性と50代の男性利用者（障害の程度は中程度）が鉢合わせし、室内で利用者が頭にけがをした。何らかの形で、男性がけがを負わせたとみられる。

施設職員は、利用者が頭を切って血を出していたことから119番。利用者は病院に搬送され頭の傷を縫う処置を受けた後、施設に戻った。大宮東署は、「重傷事案」として対応。午後10時すぎ、けがをした利用者を署に同行させ、事情聴取を行った。

翌27日朝、署員は裁判所の令状に基づき、職員の付き添いの上で男性に任意同行を求め、傷害容疑で逮捕した。だが、逮捕状などを説明する際、支援者や専門職の立ち会いはなかった。この点について、知的障害者の刑事事件に詳しい大石剛一郎弁護士は「障害特性を理解してコミュニケーションを支援する人の立ち会いがなければ、有効とは言えない」と指摘する。

施設職員は「会話の内容を理解できない人に対し、どのような手続きで、逮捕送検に至ったのか」と疑問視する。

男性はさいたま地検に送検されたが、勾留請求されず、6月28日に釈放され、後に不起訴となった。同地検は釈放などの理由を「捜査に支障があるため回答できない」とした。

同署は取材に「被害者が負傷していることから、傷害事件として両者の生命・身体の安全を確保することを最優先した。第二、第三の被害を防ぐためなどを考慮した措置で適正だった」と回答した。

万引き まさか認知症とは 精神鑑定で無罪に 采沢嘉高 采沢嘉高

朝日新聞 2017年9月24日

無罪となった男性が、万引きをした商店。店番がいる目の前で、店先の陳列台から大根の

漬物を手にとって走り去った、という＝大阪市

漬物を盗んで逮捕、起訴された大阪市の男性（72）が今春、裁判で無罪判決を受けた。認知症の一種によるもので、本人の責任は問えないと判断されたからだ。男性はそれまでも3回、万引きで有罪判決を受けていた。これらの事件も認知症が影響した可能性があると判決は指摘したが、捜査や過去の裁判では考慮されておらず、家族も気づいていなかった。（采沢嘉高 采沢嘉高）

■家族「盗み癖」と思い込み

男性は2年前の12月、大阪市内の商店で大根の漬物2袋、500円相当を万引きしたとして起訴された。店先で商品を手にとって自転車で走り去ったが、追いかけてきた店員に現行犯逮捕されたという。

昨年2月、大阪地裁で始まった裁判で、長女の年齢を大きく間違えるなど、男性の不自然な言動が目立った。裁判官が精神鑑定を促し、弁護側が依頼した。「前頭側頭型認知症が犯行を引き起こした」との結果が出た。



福祉有償運送で高齢者外出支援 井原のNPO「よしいかけはし」



山陽新聞 2017年9月23日

よしいかけはしが福祉有償運送で使用する車両

井原市芳井町で高齢者や障害者の送迎にあたる福祉有償運送事業を行うNPO法人「よしいかけはし」（河合恭廣理事長）が発足、業務を始めた。

福祉有償運送は公共交通機関を1人で利用することが難しい人を対象に、通院、通学、余暇などで外出できるよう低料金で移送する仕組み。非営利法人に限り事業を行える。

高齢化率上昇や1人暮らし世帯の増加が進む芳井町地区は、食品や日用品の買い物、通院などのための“足”の確保が課題。よしいかけはしは、住民の生活を支援しようと地元住民が準備、今年2月にNPO認証、9月5日に有償旅客運送の登録を受けた。13日から既に業務を行っている。

旧井原消防署芳井分駐所（芳井町吉井）を事務所とし、車いすに対応したスロープ付き軽自動車1台を所有。登録ドライバー6人が、市内病院への送迎などをしている。

25日、事務所で開所式を開く予定。早川勇副理事長は「住民が住み慣れた地域で暮らせる社会づくりを後押ししたい」と話している。

福祉有償運送を行う事業者は、井原市内では「まちづくり岡山ネットワーク」（東江原町）に続き2例目。井笠地域では5例目。

リリー・フランキー「障害者も恋やセックスしたい」 日刊スポーツ 2017年9月24日

リリー・フランキー（53）が、ニッカンスポーツCOMの単独インタビューに応じた。リリーは主演映画「パーフェクト・レボリューション」（松本准平監督、29日公開）で、幼少時に脳性まひを患い、車いす生活を続けながら障害者の恋愛や性の支援を訴え、啓発の活動を続けるクマを演じた。原案となった「たった5センチのハードル」（01年）の著者で、クマのモデルとなった活動家・熊篠慶彦氏（47）との10年来の交流を経て、思う障害者の性、恋愛に対する健全者の誤解について思いの丈を語った。

－障害者の性、恋愛を真っすぐに描いている。多様性への理解が進んでいる現代でも、

障害者の性を語ることへのハードルは高いことがあらためて分かった

リリー 熊篠君の夢を昔、聞いたことがあるんですけど「やっぱ、立ちバック（セックスの体位）ですよねぇ」って…夢らしいですよ（笑い）そういうことを普通に言える、すごくユーモアがある。でも、そういうので笑っていいかを、ためらう人もいないですか。障害者風俗の映画も昔、あったりしたんですけど、もう、それ以前のことの認識というか…障害者が恋愛したい、セックスしたい、性欲があるということを、健常者がほぼ、ほぼ認識していない。何で、そんな当たり前のことを認識していないのかなという。基本的に、歩けないとか、手が曲がっているとか、しゃべることが出来ないとかあっても、恋愛したいとか、セックスしたいって絶対に思っているはずなのに、何で思わないってことにしちゃっていたんだろうなって。

－問題は健常者の側にあると

リリー 健常者の誤解によって起きている問題ですからね。この10数年、20年くらい、障害者を扱う物語は「障害者はピュアなものである」という扱いになっていたから…。障害者を妖精化、聖人化しているのもあるし、性欲を表面的なものにすると、ボランティアの人も急に冷たくなると。結局、障害者が、健常者が思う架空の障害者を演じなきゃいけないという。映画はドキュメンタリーではないので、見て娯楽として楽しんでくれて「そう言えば、障害者の人だって、そりゃあセックスしたいよね。何で、そう思わなかったんだろう」っていうことくらいで、いいと思う。熊篠君がずっと活動の中で訴えている「障害者だって恋愛したいし、セックスもしたい」ということが、映画の中で伝わるとは思わないんですけど、映画が出来たことで、こうして取材をしていただくことで伝わればいいなと思っています。

－劇中でも、小池栄子（36）演じるボランティアが、自分の中でのボランティアのあり方について、自己満足という部分がある中でも、社会貢献したいと葛藤する場面がある

リリー ボランティアの人の間でも（障害者に対して）「かわいそうなものとして扱ってあげていたのに、何でセックスとかやりたがっているの」って感情が、どこかにあったりとか…。日本の中に、善意の中の、すごい無理解があるじゃないですか？ 熊篠みたいに、自分の介助されている部屋にAVがあったり、TENGA（男性用アダルトグッズ）を置いていたりというのは、なかなか珍しいと思う。障害者の方は、介助の人に（性欲などの話を）言にくい。障害者と介助の人の間に、そういうことを、ちゃんと聞いてあげられるカウンセラー、セラピスト、障害者が言える相手がいれば…介助の人に全てまかかってもらうのは、なかなか難しい。

－障害者向け風俗もある

リリー あるんですけど、障害者はお金が少ないじゃないですか。でも、それって健常者でも金がないヤツが、セックスしたくても風俗に行けないのと一緒に思うんですよ。根本的に一緒に思うのが1番、分かりやすい。人権以前の生理（障害者の性欲）を、今までないものにしていたのは、日本人のどういうメンタリティーだと。障害者風俗に、いきなりフォーカスを当てて映画にする企画もあるけれど、そこにいく以前のことが、みんな分かっていない。

－今回の映画は、そうしたことを、説教くさくなくソフトに伝えている

リリー 良くも悪くも、ポップなエンターテインメントな仕上がりになったので、説教じみた重たく苦しい、社会に問題を投げかけるというところからかけ離れた…言ってみれば、すごいバカ映画じゃないですか（笑い）障害者が主人公でも、笑えるバカ映画ってないことだから、いいことじゃないかなって思うんです。

次回はリリー・フランキーが、自らにとって特別な作品になった今回の映画のこと、そして俳優業、自身の恋愛の現状について語る。【村上幸将】

◆リリー・フランキー 本名・中川雅也。1963年（昭38）11月4日、福岡県生まれ。武蔵野美術大卒業。20代からイラストレーター、文筆業、映像制作、バンド、ラジオなどで活躍。05年の小説「東京タワー ～オカンとボクと、時々、オトン～」(扶桑

社)は映画、ドラマ、舞台に。初出演映画は04年「盲獣 VS 一寸法師」。代表作は「そして父になる」、「凶悪」(13年)など。血液型B。

知的障害者550人熱戦 スペシャル五輪近畿大会 サッカーで懸命にボールを追う選手ら=尼崎市西長洲町1

神戸新聞 2017年9月23日

知的障害のある人たちのスポーツ競技会「スペシャルオリンピックス(SO)日本・近畿ブロック大会」が23日、兵庫県尼崎市西長洲町1の尼崎市記念公園などで開かれた。近畿2府4県から選手約550人が集まり、日ごろの練習の成果を披露した。



SOは1962年、米国のケネディ大統領の妹が自宅の庭を開放したデイキャンプが始まり。日本には80年に伝わり、93年から現在の組織が活動が続いている。スポーツを通じて自信と勇気を身に付けてもらい、社会参加へつながることを目指している。

大会は同公園のほか、神戸市灘区の「神戸六甲ボウル」などが会場になり、陸上競技やサッカー、水泳、テニス、バスケットボール、ボウリングなど9種目で熱戦が繰り広げられた。また、コーチやボランティアら約650人も参加し、運営を支えた。

1500メートル走で1位になった高砂市の男性(40)は「ベストタイムよりは落ちたけど、最高の気持ち」。ボランティアで参加した県立尼崎高校2年で陸上部の男子生徒(16)は「障害があってもなくても、みんな同じように最後まで走る。陸上競技の喜びは変わらず、貴重な体験となった」と話していた。(土井秀人)

預け入れ26児身元不明 赤ちゃんポスト 熊本市専門部会 「出自知る権利保護を」

読売新聞 2017年09月24日



親が養育できない子どもを匿名で託せる慈恵病院(熊本市)の「このとりのゆりかご」(赤ちゃんポスト)について、熊本市の専門部会は23日、2007年5月の開設から10年間の検証結果を公表した。17年3月までに預けられた130人のうち26人の身元が不明で、「出自に悩む子どもをゆりかごが生み出す事態は、早

急に改善されなければならない」として、仕組みの再検討を求めた。

130人の内訳は、新生児107人、乳児15人、幼児8人。約1割の14人に障害があった。低体重などで医療行為が必要だったのは29人だった。

預けに来た生みの親らに病院側が接触するなどして身元が判明したのは、104人。うち25人は乳児院などの施設、17人は里親のもとで育つ。35人が育ての親と特別養子縁組を結んだほか、23人が元の家に戻った。身元が分からない26人のうち23人は、里親や同縁組が成立した家族と暮らし、3人が施設にいる。

【ZOOM東北】福島発 高齢者の防犯・交通安全へ

産経新聞 2017年9月24日

■県警が試み、シルバーパワーで対策を

県警が今月11日付で出した「警察一丸となった高齢者対策の推進」を指示する本部長通達。高齢化が進む中、住民の安全・安心を守るには、今後の高齢者対策が鍵を握ると判

断したからだ。従来の取り組みは、縦割りの弊害に陥りがち。情報を共有して、部門横断的に対応することで、より効率的で効果的な施策を目指す。さらに、高齢者が起こす事件・事故が増えているため、「守る」に加え「抑止」の視点も持つよう、警察官の意識改革も促す考えだ（竹中岳彦）

県のまとめによると、今年8月1日現在の県人口は約188万3千人。このうち65歳以上の高齢者は約56万人で、人口に占める高齢者の割合（高齢化率）は、初めて30%を上回った。平成20年と比べても、人口は約18万3千人減少したが、高齢者は逆に6万9千人増加。今後、年間1万人ずつ増加すると見込まれ、高齢者対策は大きな課題の一つになっている。

県警も防犯の講習会を開くなど、高齢化対策に取り組んでいる。特に交通安全啓蒙（けいもう）は「毎日、県内どこかで開いている」（県警幹部）という。だが、内容となると「担当部門のテーマに重きが置かれ、ほかの部門の話があまりなく、縦割りになりがち」（同）なのが実情だ。せつかくお年寄りに集まってもらっているのだから、「防犯も、なりすまし詐欺（特殊詐欺）も、交通も注意を呼びかけていこう」（同）というわけだ。

さらに、県警が基本的な考え方に挙げるのが“発想の転換”だ。高齢者は“弱者”で守る対象、という考えが根強い。だが、高齢者の運転ミスが原因の死傷事故もある。万引などで摘発される高齢者も増えている。高齢化が進めば、高齢者の犯罪増加は想像にかたくない。「つまり、これまで被害者にならないように、という対策が主眼だった。でも、今後は高齢者が加害者になる事案を防いでいかなければ、対策として不十分だ」という。

そこで県警がさらに力を入れようとしているのが「高齢者の社会参加」。シルバーパワーを対策に取り込もうという考えだ。

「地域安全、交通安全、防犯活動…。さらに子供の説く見守りと、高齢者でも活躍の機会はたくさんある」と幹部の一人はいう。例えば高齢者が子供たちを見守り活動が、街の防犯活動につながり、住民の意識啓蒙につながる。さらに、交通安全の呼びかけが、高齢者自身の意識向上につながる…という“好循環”も期待できるとする。しかも、「社会に役立っていることを実感でき、高齢者のモチベーションを向上させる効果もある」と説く。

また、高齢者の社会参加促進は、同年代との交流や孫のような世代と触れ合う機会も増え、「精神的な安定にも効果がある」（関係者）といい、こうした交流が、さまざまな情報や変化のシグナルの把握につながるという。

昨年、相馬地方で高齢の女性が車で出かけたまま帰らず、近くの山中で遺体が見つかったケースがあった。「この件で、近所の人や県外に住む子供は『最近、様子がおかしい』『急に痴呆症が進んだな』と、かすかな変化を感じていた。しかし、警察や行政機関はこの変化を把握できなかった。地道な情報の積み重ねや、関係各機関との連携、情報共有が、こうした痛ましいケースを減らすことにつながる。認知症の徘徊（はいかい）や虐待の防止にも役立つ」と、幹部の一人は力を込める。

本部長通達を受け、各部門は具体的な対策を検討中だ。「高齢者対策は、いつまでに何かを仕上げる性格のものではない。できることから速やかに実施に移す」（松本裕之本部長）。

福島の試みがうまく機能すれば、高齢者対策の一つのモデルケースとなるかもしれない。

山谷シスター 命の名簿 労働者の街 生きた証し刻む 東京新聞 2017年9月24日

簡易宿泊所が並ぶ東京・山谷地区で亡くなった日雇い労働者や路上生活者らの名前を、一枚の紙に刻んでいる女性がいる。三十年間で、その数は七十九人。無縁仏となる人も多い中、誰から求められるのでもなく名簿を付け続ける。それぞれの生きた証しを残すために。（中村真暁）

この女性は、炊き出しや生活相談などの活動をしている市民団体「ほしのいえ」（荒川区南千住）の代表、中村訓子（のりこ）さん（74）。カトリックのシスターだ。

きっかけは、山谷地区で夜回りなどを始めたころ出会った労働者の男性の死だった。体を壊しても経済的理由で十分な治療が受けられずにいた。受診を勧め、入院したが、一九八七年三月九日に五十九歳でがんで亡くなった。



「ほしのいえ」の中村訓子さん＝東京都荒川区で（池田まみ撮影）

駆けつけた病院で遺体と対面すると、口から血が流れたままで、ぬぐうこともなく放っておかれていた。「同じ命を持ち生まれてきたはずなのに、なぜ人によって対応が違うのか、許せなかった。このとき、私の『山谷』が始まった」

名簿は、この男性が一人目。今月までに亡くなった山谷に暮らす人々や、中村さんと一緒に炊き出しなどをした仲間の名前が、命日、年齢と共に記されている。年齢は、二十四～七十七歳。二十、三十代の若者も少なくなく、餓死や病死、自殺の人もいる。

ほしのいえのスタッフは、死去の報を受けて病院や火葬場へ駆けつける。「関わってきた命を放っておけない」と、誰もいない葬儀場で遺骨を拾ったり、家族から拒まれた遺骨を引き取ったりしたことも。周囲からは、死亡した際の状況もできる限り聞き取る。

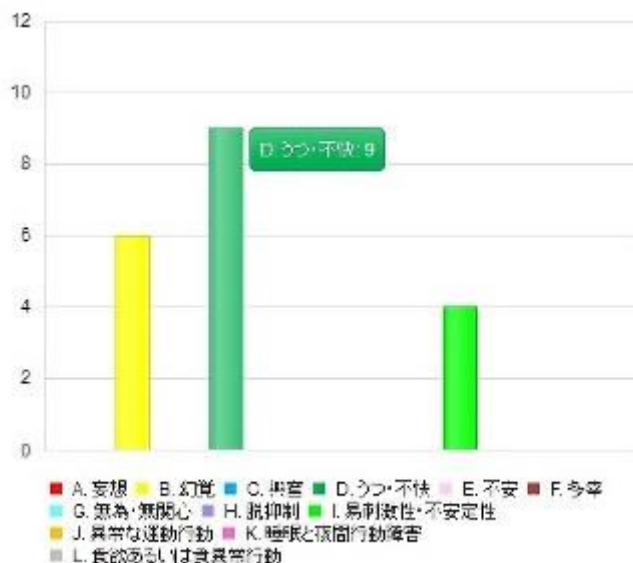
それでも名簿には、「イシさん」や「ネコの叔父さん」など通称名の人や、亡くなった日付がない人も。過去を語らない人が多く、詳細が分からないためだ。

名簿は何度も更新し、普段は事務所に掲げ、スタッフが祈りをささげている。先月の地域の夏祭りでは、仏教とキリスト教の合同慰霊が初めて企画され、名簿を祭壇に掲げた。見た人から「このおじさん、死んだのか」「この人知っているよ」と声が上がった。

「ちゃんと命を持って生きていたよ、と覚えていたい。名簿を見れば一人一人を思い出し、その人の話ができる。山谷の人たちが名簿の存在を知れば、(死後に)自分のことを祈ってもらえると安心できるのでは」

世の中が弱い立場の人を追い込んでいく状態は変わっていないと、中村さんは感じている。「命の尊厳が認められる居場所があれば、もう少し生きやすくなるはず」と信じて活動を続けている。

<山谷地区> 明治通りの泪（なみだ）橋交差点を中心に、台東、荒川区に広がる簡易宿泊所の密集地域。山谷は昔の地名。現地にある公益財団法人「城北労働・福祉センター」などによると、戦後、労働需要の増加で日雇い労働者の街となり、東京五輪前年の1963年には、簡易宿泊所222軒に約1万5000人が生活していた。現在は、宿泊所約150軒に約4200人が暮らす。宿泊者の平均年齢は66・1歳で、9割以上が生活保護を受給している。



認知症 行動要因、数値で可視化 東京都医学総合研究所など、専門職向けにプログラム

毎日新聞 2017年9月24日
「介護拒否」も、具体的な項目を出現頻度ごとにグラフ化する＝東京都医学総合研究所提供

東京都医学総合研究所とスウェーデンの研究チームが、認知症の症状に伴って表れる暴力や徘徊（はい

かい) といった「行動・心理症状」を軽減するため、在宅介護の専門職向けにプログラムを開発した。症状を数値やグラフで可視化することで関係者が情報を共有し、適切なケアにつなげることが期待される。

認知症の症状は、記憶障害や判断力の障害などの「中核症状」と、不安や抑うつ、興奮などの「行動・心理症状」に大別される。行動・心理症状は、適切なケアや薬で改善するが、薬の副作用で悪化することも多い。

岡山で石井十次顕彰の記念祭 「孤児教育会」設立から130年

山陽新聞 2017年9月23日

石井十次の遺徳をしのんだ記念祭

日本初の孤児院を開設し「児童福祉の父」と呼ばれる石井十次(1865～1914年)を顕彰する記念祭(岡山博愛会主催)が22日、岡山市中区門田屋敷の孤児院跡地にある博愛会の診療所で開かれた。

孤児院の前身「日本孤児教育会」が設立されて130周年の節目の記念祭。雨の中、玄関前の十次の胸像の周りに関係者約100人が集まった。

博愛会の更井哲夫理事長が、東北地方で大飢饉(ききん)が起きた際、十次が1200人以上の孤児を引き取って育てた活動を紹介し「公的制度がない時代に身を削って子どもたちを救った十次のように、愛の行いを実践しましょう」とあいさつ。全員で賛美歌と祈りをささげ、十次の遺徳をしのんだ。

記念祭は、岡山博愛会の礎を築いた米国人宣教師アリス・ペティー・アダムスと十次に交流があったことから、日本孤児教育会の設立日(22日)に合わせ、2003年から毎年開かれている。



施設生徒の自立を支援 退所を前にセミナー

佐賀新聞 2017年09月24日

佐賀市児童養護施設の退所を控える高校3年生の自立を支援するセミナーが23日、佐賀市で開かれた。社会人に必要なコミュニケーションの基本や、対人関係を円滑にするコツをアドバイスした。



対人関係を円滑に進めるコツを助言する窪田広信さん＝佐賀市のアバンセ

施設の入所者は高校を卒業する18歳で原則退所しなければならないが、貧困や親の虐待で施設に入ったケースでは親を頼ることができない。セミナーはこうした生徒の就職や進学をサポートしようと、NPO法人「ブリッジフォースマイル」(同市)が8月から開いている。

講師を務めたNPO法人「国際教育支援機構」(福岡市)の窪田広信代表(39)は、退所者の多くが「職場での人間関係」などコミュニケーションに関する悩みを抱えているというアンケート結果を紹介。「一方的ではなく、相手に合わせて言葉を選ぶことが重要」と助言し、まず自分から進んであいさつすることを求めた。

県外での就職を予定する男子高校生(17)は「社会では自分の考えを伝え、相手のことを理解することが重要だと分かった」と話していた。セミナーは来年1月まで6回開く。

目指せ「東京パラ」式典 障害者のダンサー育成プロジェクト、大阪で始動

産経新聞 2017年9月24日
初練習に汗を流す障害者ら。指導を受けながら自由に体を動かした＝8月6日、大阪市鶴見区の花博記念ホール（奥清博撮影）



2020年東京パラリンピックのセレモニー出演を目指して、障害者のエキストラダンサーを育成するプロジェクトが大阪で始動した。大阪府の舞台芸術事業の一環で、国際的に活躍するダンサーを講師に招き、技術や表現力を磨いていく。エキストラダンサーは華やかな式典に欠かせない存在で、東京大会での募集の詳細はまだ決まっていないが、関係者は「大阪からパラリンピックの舞台へ」と意気込んでいる。（藤井沙織）

「木になりましょう…風にそよぎます」「少しずつ枯れて…種になります」

大阪市鶴見区の花博記念ホールで8月6日に行われた初練習。自由に体で表現する参加者たちは、車椅子に乗っていたり、聴覚や知的に障害があったりする。

事業自体は15年ほど前から「ビッグ・アイ（国際障害者交流センター）」（堺市南区）が委託を受けて行い、これまでは11月の発表会が目標だった。しかし今回は「東京大会に向けた人材育成」を掲げ、プロダンサーの森山開次さん（43）に振り付けや演出を依頼することになった。

「多様性と調和」が東京大会の一つのコンセプトでもあり、参加者は居住地や障害の有無を問わず募集。集まった約90人の7割ほどが障害者で、11月の公演に向けて練習を重ねながら、3年後の東京パラリンピックを見据える。

知的障害のある堺市美原区の渋谷亜純さん（30）は「スポットライトを浴びて踊りたい。皆と一緒に式典にも出たい」と声を弾ませる。

府が今回の事業に力を入れているのは、ダンスや演劇といった障害者による舞台芸術の活動が、国内ではまだまだ小規模なものにとどまっている背景がある。障害者の芸術活動に長年携わるビッグアイのアーティストエグゼクティブプロデューサー、鈴木京子さんは「指導を受けられる環境が少ない」と指摘する。バレエ教室を訪ねても「前例がなく指導できない」と門前払いされるケースがしばしばある一方で、欧米ではプロの劇団も多いという。

2012年のロンドン大会や昨年のリオデジャネイロ大会の開・閉会式では、障害者と健常者がステージ上でパフォーマンスを見せ、フロアを埋め尽くす大勢のエキストラダンサーが華やかなショーを演じた。東京大会のエキストラについて、東京五輪・パラリンピック競技大会組織委員会は「人数や募集方法などはコンセプトや演出家が決まってから検討する」としている。

鈴木さんは「よく『障害があるのに頑張っている』と思われるが、それは違う。レベルの高いパフォーマンスは、等しく芸術なんです」と強調。「パラリンピックの募集の際、声がかかると存在感を示していく。東京大会を機に舞台上で活躍する障害者が増えれば」と期待を込める。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

